

⑤ 団塊の世代 パワールのいずみ

1 泉区団塊1万人

「9965人」。泉区内に居住する昭和21年から25年の間に生まれた「団塊の世代」の人口である。泉区の人口（15万3257人）の約7%を占め（平成18年12月1日現在）、今年2007年から順次定年退職を迎える。

さて、現在、地域では、団塊の世代が経験してきた「高度成長」「ベビーブーム」「向こう三軒両隣」といった社会状況とは相反し、急速な少子高齢化の進展を背景とした核家族化や人間関係の希薄化が進んでいる。その中で、子育て、健康づくり、介護予防、防犯、防災等で、困ったときの支え合い、助け合える仲間づくり、地域づくりが求められている。

特に、自治会町内会活動をはじめとする地域活動が盛んに行われる一方で、担い手は高齢化し、役員は様々な活動を一人二役以上を兼ねる等、いずれの団体でも固定化が進んでいる。

定年後、確実に増えるのが「自分の時間」。

自然と緑豊かな泉区で、健康で生き生きとした楽しい生活を送れるよう、コミュニティイビネスやNPO、ボランティア活動等の立ち上げを支援し、団塊世代のパワーが新たな担い手へと躍進するきっかけづくりを推進する泉区役所の取組を紹介していく。

【目標】

- ・ 地域活動や地域福祉の現場に多くの団塊世代が参画している。
- ・ 新たな担い手が増え、支え合う地域コミュニティの再生が進んでいる。
- ・ 多彩な活動が展開され、地域のまちづくりが進展している。

2 地域課題解決の新たな打ち出し

「何か、新しい打ち出しは？」18年度予算策定に当たり、地域課題解決に向けた施策が求められた。そこで、浮

上したのが、「団塊の世代」というキーワードである。一つに、報道や出版物に「2007年春に団塊世代の大量退職が始まる」と取り上げられたこと。二つに、行政の一端を市民ボランティアが担う「行政サポーター」制度を視察した際、志木市（埼玉）、太田市（群馬）の担当者が、「リタイヤ世代は地域活動や社会貢献の強い意欲がある」と強調したこと。三つ目に、「地域のまつりには多数の人が集まる、しかし、防犯やG30では限られた関心と参加しかない。新しい担い手がほしい。」と嘆く地域の声の多さである。

泉区では、独自の地区担当制を取り、職員が「地域のコーディネーター」として、地域と協働して課題を解決していくこうと、積極的な地域支援を推進している。三つ目の担い手不足の地域課題も、地域住民と区の地区担当者で共有され、各連合の地域福祉保健計画の多くに、対策の必要性が盛り込まれていた。

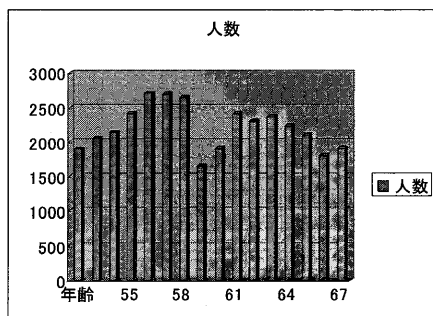
地域振興課では、週刊ダイヤモンド誌（平17.10.8号）掲載の千葉県我孫子市の取組に注目した。シニア世代支援を「将来を見据えた『まちづくり戦略』の一環」と位置付け、「団塊世代に地域の課題を解決する新たな戦力になって」「地域社会を支える側に回ってもらおう」と施策を展開する。具体的には、市が「定年の皆さんお帰りなさい！シニア世代歓迎の集い」を主催し、地域活動団体の紹介やメンバーとの交流を仲立ちし、さらに体験参加の機会を用意しているという。

同時に、福祉保健センターでも、地域活動の担い手として同じく団塊世代に着目し、福祉保健課とサービス課で地域活動参画のきっかけを提供する方向で企画検討した。「身近な地域ケアプラザや地

執筆

國分 忠博、堀口 和美
 泉区福祉保健センター福祉保健課
 中西 美和子
 泉区福祉保健センターサービス課
 林 香澄、鈴木 祐子、
 太田 由紀枝、
 藤岡 聖美、平本 雅典
 泉区地域振興課

図 泉区の年齢別人口分布



域包括支援センターを会場に、様々な学習会・講習会を開催し、施設コーディネーターや区福祉保健センターが、受講から継続した活動まで支援して、新たな担い手の掘り起しを図ることとした。これが「地域交流推進事業」として18年度に46万円が予算計上された。

3 さあ、準備にとりかかれ

事業の参考にするため他区・他都市の具体的な取組調査から始めた。磯子区の団塊世代対象事業をヒヤリングしたり、武蔵野市・足立区等の実施状況をホームページで調べた。

他都市で実施されたアンケート調査の結果を見ると、設問や選択肢は違うものの、「定年後にやりたいこと」として、趣味活動、勉強・習い事、健康の維持管理、そして仕事（収入を得られるコミュニティビジネスを含む）が多くあげられていた。

また、ボランティア活動への関心は高いものの、自ら立ち上げるのではなく、既存の活動へ参加したい方が多いことが把握できた。

同時に、泉区の団塊世代職員へ、「どのような企画なら

参加したいか」と聞いたところ、職種・職位を問わず「俺は、どんな企画でも参加したい」という意見がほとんどで、団塊世代を地域に引っぱり出す難しさを実感した。

区では、生涯学習と福祉保健の両分野で、団塊世代に対する事業を企画したが、泉区社会福祉協議会でも、現在ボランティア活動中のシニア男性に団塊世代受入の智恵を出す「男性ボランティア検討会」が活動を始めていた。そこで、区社会福祉協議会に呼びかけて、福祉保健センター（福祉保健課・サービス課）と地域振興課の三者が、目標、計画、手法を共有する打合せを持つことにした。

第1回顔合わせ（5月17日）で目標を共有できたため、ここに「団塊チーム」が発足、それぞれの団塊世代対象事業を「団塊世代パワーのいずみ」の冠のもと、共同で実施することとした。以降、6月末まで、ほぼ週1回の会議を持ち、団塊世代の関心を引き寄せるイベント等の企画・手法等を検討していった。

4 泉区事業のコンセプトを固める

各課個別事業の集まりか

ら、1つの考え方で統合された事業展開へ。苦しむ中で、転機が訪れた。7月9日開催のシテイフォーラム（西部方面、テーマは「新しいパワーを求めて、地域が待っている団塊世代」）に区の取組をパネル展示することになったのである。

パネルに表示する内容を考える過程で、講座や体験に参加した区民が自己を高めるだけでは不十分で、行政が働きかけるならば、個人の自己実現のためではなく、団塊世代が今まで培ってきた経験や技能をいかして、地域活力創造の担い手になっていただくところを重要と気付いた。一つの壁を乗り越え、6月28日に企画書がまとまった。

企画書では、まず、泉区の状態を、①団体の担い手が高齢化・固定化 ②子育て、青少年育成、介護、健康づくり、防犯等のニーズ増大や支え合う関係づくりが必要、③参画の入口の「扉」が見えない、という課題が明らかになった。一方、団塊世代は①地域に参加する意欲がある、②ただし、そのきっかけがつかめていない、と分析した。

そこで、入口の扉を開ける『鍵』が必要だと、活動参画のきっかけづくり、担い

手づくり、持てるスキルの活用、の3点に注力することになった。

5 11月25日に向けた準備を進める

検討の結果、旗揚げとして11月25日に講演会・パネルディスカッション及び地域活動見本市を同時開催する。それに続き、担い手づくりやスキル活用の「入口」となる講座を12月から3月にかけて多方面で展開する。生涯学習支援センターでは、連続講座を2コース、福祉保健センターでは、地域ケアプラザや地域包括支援センターで講座・教室を8コース、区社協でも男性向け講座を、それぞれ実施すると決まった。

いざ、準備に入ると仕事量は予想以上であった。例えば、講演会と見本市を同時開催すると、参加者には「一度に地域デビューに関するあらゆる情報が手に入りますよ」とアピールできる。しかし、1階と4階の異なるフロアで講演会と地域活動見本市を同時進行すると、進行手順やスタッフ配置は複雑さを増す。双方の連動がうまくいくのか、不安がつきまとった。

講演会の講師は、団塊のテ

ーマで講演実績が豊富な候補者から、具体的な内容でお話しいただけるシニアライフアドバイザー・松本すみ子氏を選んだ。

パネルディスカッションの発言者として、地域で積極的に関与する区民3人に体験を話していただくという枠組みはすんなりまとまった。しかし、絞り込みに時間を要した。泉区らしさがあり、団塊より少し上の世代で、後輩にエールを送る気持ちを含めつつ簡潔に話ができる方、という条件で打診を重ね、結局、「福祉」「伝統芸能」「生涯学習」分野の3人をお願いした。

パネルディスカッションでは、参加者が親近感を持つことが重要になる。事前打合せでは、経歴や地域活動を始めたきっかけ、活動の楽しさおもしろさ、抱える課題を引き出した上で、具体的に、参加者と同じ目線で語るよう依頼した。ことに、会社人から地域人へ転換する「きっかけ」は、参加者が最も聞きたいポイントで、そこを重点的にとお願した。

「地域活動見本市」の成否は、参加団体募集にかかっている。広報よこはま泉区版はもちろん、区内で活動する多数の団体のうち、地域貢献や

地域活性化につながり、かつ新たな構成員受け入れに積極的な団体に案内状を送った。募集数30に対し、33団体から申込みがあった。事前説明会では、事業趣旨や当日の流れを詳しく説明し、積極的な団体PRをお願いした。

残る課題は「集客」である。

広報紙の1ページ全面を使った特集で訴え、カラー刷チラシを区内企業や関係機関に配付して掲出・配架を依頼した。さらに、真紅のノボリ旗を庁舎内外の目立つところに立てたが、それだけでは不十分。折しも泉区制20周年記念イベントが多数開催されたので、その会場でPRや、鉄道会社と交渉して各駅にポスターを掲示し、団塊世代の帰宅時間帯（20時から21時）に合わせて各駅でチラシを折り込んだティッシュを配り、庁舎の窓に大きな文字でイベント実施の張り紙をする、と思いつく限りのPR大作戦を展開した。

6 一いよいよ当日

天候にも恵まれた25日当日。朝早くから庁舎内外に表示物を設置し、会場の最終チェックを済ませて、参加者を待つ。前日までの申込は約90

人だが、不安な気持ちのまま開始10分前に会場を確認したところ、わずか10人。イベントは低調かと思われた。

しかし、開始直前、次々と人が集まり、100人分用意した席は、講演会開始の時点で7割方埋まり、一同ほっと胸をなでおろした。

第一部は、「団塊世代の人生設計」地域はあなたを待っている！と題する松本氏の講演である（写真1）。「80歳まで元気に過ごす」と、現役時代の労働時間と定年後の自由時間はほぼ同じ」と指摘。退職後に何かを始めたなら、それはすなわち5年10年と続くライフワークになる、時間的にも質的にも「余生」ではないと話された。続いて、ダイアグラムを用いた「私の人生豊かさ度チェック」を実施。一人ひとりの「今」の姿が仕事・健康・人間関係等6項目からなるダイアグラム上に表現され、その結果に納得する人苦笑する人：会場に和やかな空気が流れた。最後に活動の「芽」を見つげるための一助としてNPO活動の現状が紹介された。

代の関心をも引きつけていた。

休憩をはさみ、第二部はパネルディスカッション。引き続き松本氏がコーディネーター役を務めた。まず、各パネラーが自身の体験を語る。同じ泉区に暮らし、長年の会社勤めを経て、現在は地域で生き生きと活動する人たちが語るわけで、団塊世代にとつていわば身近な「モデル」である。まず、「伝統芸能」分野の

馬場勝己氏は、「いずみ歌舞伎保存会」会長として、毎年秋の「いずみ歌舞伎」の上演や地域の小学校での歌舞伎の指導を紹介した。地域活動、特に歌舞伎との出会いを中心に、DVDの映像も混じえて体験を語った。

続いて「生涯学習」分野で多彩な活動を展開する本田英昭氏は、コミュニティハウスを会場に開いている「デジカメ指導」と「おもちゃ病院」について語った。モータースラリーマンだった氏が地域のボランティア活動に足を踏み入れたきっかけ、その後の活動の広がり豊富な画像と共に紹介した。

最後は、「福祉」分野で活動中の上谷一雄氏。顔見知りになった近所の寺の住職から、地域に暮らす中途障がい者のボランティア活動への参

加をすすめられ、次第に福祉に関わったという。

後半は松本氏が各人の発言に質問やコメントを挟む形で展開した。司会者とパネラーとの会話のキャッチボールが狙いだったが、話が弾みすぎて会場が取り残されてしまう部分があった。会場からの質疑応答も予定したが、時間がオーバーし、数問を受けたところで時間となった。

講演会・パネルディスカッションを通して参加者の反応はおおむね良好で、満足げな表情を浮かべて会場を後にする参加者が多かったように思う。

一方「地域活動見本市」（写真2）は講演会から遅れること1時間、11時に始まった。しかし11時から12時の間は講演会が実施されていることから、来場者はきわめて少なかった。その反面、参加団体相互は交流を深められたようで、この時間帯は決してむだではないという声が続いて寄せられた。実は、地域団体の異業種交流会的要素も想定していたので、自発的な交流が始まったところに地域で活動する団体のエネルギーを改めて認識することになった。

12時にパネルディスカッションが終わり、勝負のときが来た。4階の参加者を一人でも多く見本市の会場に誘導するため、スタッフ総出で声をからした。

幸い、多くの参加者が、事前配布した「出展団体一覧」の冊子を片手に、お目当ての団体を見て回っていた。松本氏やパネラー各氏にも見本市の会場に入ってもらい、参加者からの追加質問や意見交換に応じてもらった。

参加者はパネラーに、より

写真1 松本すみ子氏の講演会



写真2 区民ホールでの地域活動見本市



親近感を抱いたようで、各氏の活動をより詳しく質問し、それに応じて話が弾む姿が見受けられた。出展準備のため松本氏の講演を聞くことができなかつた団体の関係者も、この時間帯に松本氏と直接話できたようだ。

見本市で、すでに地域で活動している先輩の姿を紹介し、地域団体の存在を知らしめたことは、地域活動の「扉」「人口」を示すという当初の目的は達成できたと考えている。

7 地域活動への扉を開く 講座を展開

旗揚げの講演会・見本市に続き、各種講座・教室等も動き出した。

区民に身近な地域ケアプラザ等を会場とする講座・教室準備では、各施設のコアディネーター等と7月から協議を始めた。受講後に参加者の継続的な活動を支援できるように、その地域や施設ならではのテーマを決めていった。その結果、「そば・味噌作り」、「ウォーキングと地域マップ作り」、「男の厨房」(写真3)、

「バンドを作ろう」、「人生設計・権利擁護等」、「園芸」、「認知症予防」、「コーヒーマシンの淹れ方」等、多様なプログラムが用意できた。

また、各施設の地域包括エリア(2/3連合自治会)では、その施設で実施する講座・教室のチラシの班回覧を依頼する等、スポット的に周知に努めた結果、各講座・教室に10数人〜20人が集まった。ほとんどの参加者は、地域活動への参加経験がなく、きっかけ作りや新たな人材発掘といった講座の目的が達成できた。

この講座・教室は、①必ず地域福祉保健計画や地域の課題を提示、②既存ボランティア

写真3 「男の厨房」の様子



アグループの紹介、③施設のコーディネーター等の職員及び福祉保健センターの地区担当保健師が関わり、受講中から終了後の活動やグルーブ化を支援、の3点が特徴であり、この試みも順調な成果をあげた。

このほか、区役所会場では、「まちづくりのススメリ地域を作るのはあなたです」と題して、防災、農と環境、健康づくりの3テーマで、地域の具体的な活動紹介するほか、「起業のススメリコミュニティビジネスを創出しませんか」と題して実践的なビジネス立ち上げ講座を開催した。

8 一これからの取り組み

11月25日の講演会・見本市参加者の反響を見てみると、まず年齢は、アンケート回答者36人中、60代が最も多く16人、50代が10人となっている。

次に行事を知ったきっかけは、区役所のチラシが20人、広報紙が10人でネットや口コミは少なかつた。

講演会の内容は、よかつたが20人、普通が13人でよくな

いはりであつた。ただし、「もつとじっくり時間をかけてほしかつた」、「一般論ではない地区の具体例を知りたい」等の意見があつた。

パネルディスカッションは、よかつた14人、普通11人とやや評価が下がり、その理由に「パネラーの話が司会者とずれてた」、「自らの団体のPRが長い」などの声があつた。

地域活動見本市は、「多くの方が活動していることを知ることができ、励みになつた」、「時間が短く、興味あるブースの話が聞けなかつた」などの声があつた。

参加者が「今後やってみたいこと」として(複数回答)、1位にボランティア活動23、次いで、趣味稽古事17、自治会町内会活動10、市民活動7、就学・学習5と続いた。

自由意見としては、「参加者とパネラーとの意見交換をしたかつた」、「小グルーブに分かれて話し合いをしたい」などがあり、交流の時間が足りないことがあつた。また、「展示団体が共同でボランティアを実施しては」という提

案もあつた。

さて、事業2年目を迎える19年度の展開としては、これまでの事業に加えて、地域団体での活動短期体験、地域活動に現に携わる先輩区民による「団塊の相談」を実現したり、講座で出会つた志を同じくする方々のグルーブ化支援等を拡充していく。

さらに、地域が求める団塊世代の体験や技能が必要なきに、必要などところへつなげられるよう、生涯学習アドバイザー登録制度と区社協のボランティア登録制度を統合した人材バンクの整備していく。また、団塊世代を受け入れる側となる自治会町内会をはじめとした地域団体の方々の研修や働きかけなど、区政のあらゆる場面で、「団塊世代」のパワーと経験を視野に入れた展開を進めていくことにしている。

身近な地域で支え合う泉区を実現するため、団塊世代の区民の方々や地域団体とともに、その声を聴きながら、多様な事業展開を図っていきたいと考えている。